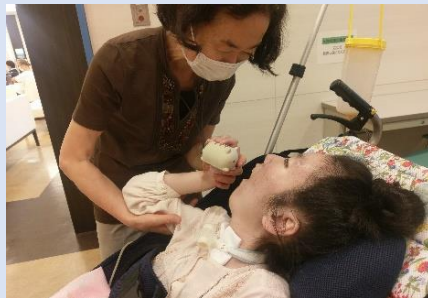


～重度重複障害者の生涯学習～

だれでも参加できる 生涯学習の機会を 作りませんか？



■はじめに

障害の有無にかかわらず、誰でも自由に、学習の機会を選択し学ぶことができる「生涯学習」への期待は高く、様々な取組が進められています。

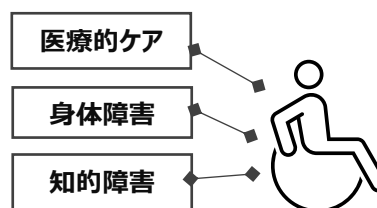
平成 26 年の「障害者の権利に関する条約」批准、平成 28 年の「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」施行等を経て、平成 29 年に文部科学大臣より「特別支援教育の生涯学習化に向けて」と題するメッセージで、学校卒業後も含めた切れ目のない学習支援に取り組むことが表明され、障害者の生涯学習のプログラム開発や地域における支援体制構築の基盤づくりが行われてきました。また、特別支援学校の学習指導要領には、「生涯学習への意欲を高めるとともに、社会教育その他、様々な学習機会に関する情報の提供に努めること」、「生涯を通じてスポーツや文化芸術活動に親しみ、豊かな生活を営むことができるよう配慮すること」という文言が盛り込まれました。

学校卒業後の障害者の生涯学習を取り巻く環境の整備は、国、地方公共団体を中心に進められているところですが、現状は、重度重複障害のある方[※]やそのご家族の「学校卒業後も学びを継続したい」という思いに対して、十分な学びの場がありません。特に、重度の障害や医療的ケアを必要とする方は、移動や参加に支援が必要なため、地域の中で安心・安全に参加できる場づくりが急務になっています。

今回、地域の生涯学習にかかわる地方公共団体、特別支援学校、NPO 法人、社会教育施設、障害福祉サービス事業所等の方々に、重度重複障害のある方の学びの現状や生涯学習への期待、実際の取組事例を知っていただきたいという思いからこの冊子を作成しました。本人や家族へのアンケート調査・ヒアリング調査、生涯学習活動提供団体へのヒアリング調査をもとに、学びのニーズや具体的な取組内容を紹介していますので、地域での取組を検討する際にぜひご活用ください。

※重度重複障害のある方とは…

このパンフレットでは、重度の身体障害や知的障害等がある方、医療的ケアが必要な方（重症心身障害者、重度肢体不自由者、医療的ケア者等）を「重度重複障害のある方」としています



※本パンフレットで紹介する重度重複障害のある方を対象に行ったアンケート調査は、令和3年度「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」（文部科学省）の「生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究」報告書より引用しています

■目次

学校卒業後の生涯学習の機会は？	1
どのような生涯学習に取り組みたい？	2
地域で生涯学習を応援するには？	3
取組事例	4
文部科学省の取組について	15


学校卒業後の生涯学習の機会とは？

▶生涯学習とは

「生涯学習」とは、一般的に、人々が生涯に行うあらゆる学習、つまり、学校教育、家庭教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など様々な場や機会で行われる学習活動を指します（文部科学白書）。

障害のあるなしに関係なく、新しいことや興味関心のあることを知ったり、学んだり、取り組んだりすることは、一人一人の能力・個性を伸ばすとともに、その人の人生を楽しく豊かにします。

生涯学習 = 自主的・自発的に
行う全ての学び

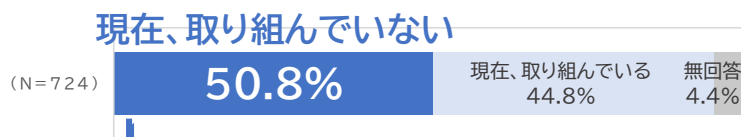


重度重複障害のある方は、学校卒業後の生涯学習の機会が不足しています

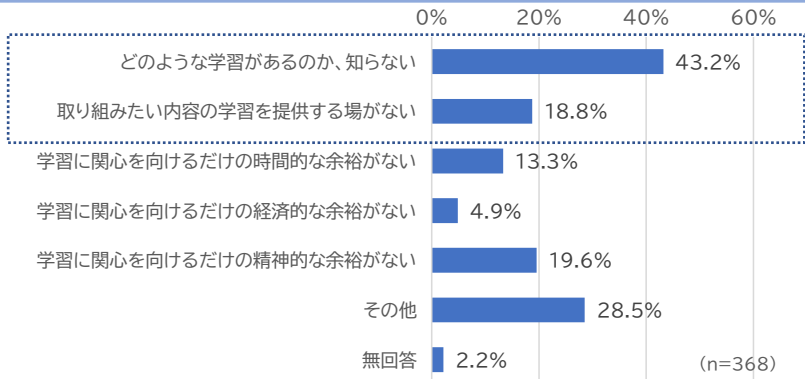
重度の身体障害や知的障害等がある方、医療的ケアが必要な方は、学校卒業後、自宅や施設等で障害福祉サービスを利用するなどして生活をおくっており、学びの機会が著しく減少しています。

重度重複障害のある方を対象に行ったアンケート調査では、50.8%が、現在、生涯学習に取り組んでいないと回答しました。その理由として、「どのような学習があるか、知らない」、「取り組みたい内容の学習を提供する場がない」といった情報提供の少なさや学び場の不足が挙げられています。心身の状況や生活の安定が優先され、学びに関心を向けるだけの余裕がないことも要因としてありますが、学びたいと思ったときに、安心・安全に学べる環境整備と情報発信は喫緊の課題となっています。

現在、生涯学習に取り組んでいますか？



現在、生涯学習に取り組んでいない理由は何ですか？



どのような生涯学習に取り組みたい？

重度重複障害のある方が、学校卒業後に、どのような学習をどのような環境で行いたいと考えているか、アンケート調査結果を基にご紹介します。重度重複障害のある方と言っても、必要なケアの内容、意思の伝達方法、外出制限の状況など、一人ひとり、生活の状況は大きく異なります。3 ページで紹介している報告書には状態別にニーズを整理していますので、合わせてご確認ください。

▶WHAT

重度重複障害のある方は、必要とするケア・サポートの個別性が高いこともあり、本人の心身の状態や希望に応じた学習を重要視する声が多く寄せられています。また、生活を充実させ、社会との接点を増やすような活動への期待も高くなっています。

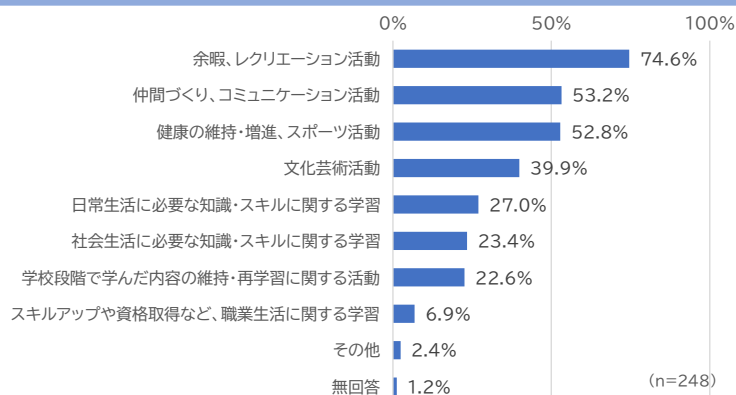
生涯学習に取り組む際に重要視することは何ですか？（TOP5）

- 1位 自身（本人）の心身の状態に合っているかどうか（55.0%）
- 2位 自身（本人）のやりたいことに合っているかどうか（52.5%）
- 3位 日常生活をより充実させる内容かどうか（50.4%）
- 4位 他者とのふれあいや仲間づくりの機会となるかどうか（48.2%）
- 5位 社会参加の機会となるかどうか（28.9%）

本人の意志を尊重したい

いろいろな人の関わりを持てる活動をさせたい

どのような学習の内容を増やしたいですか？



▶HOW

日中は障害福祉サービス事業所等で過ごす人が多く、事業所や施設における生涯学習の取組への期待が最も高くなりました。このほか、訪問での取組や、地域の活動や文化施設への参加も期待されています。

どのような手段や場所での学習の機会を増やしたいですか？（TOP5）

- 1位 障害福祉サービスの事業所、入所施設での日中活動（医療やリハビリテーション活動除）（71.0%）
- 2位 居住地周辺の地域の活動、催し物への参加（39.9%）
- 3位 支援者等の訪問による自宅や施設での学習（33.5%）
- 4位 同好者が自主的に行っている集まり、サークル活動への参加（オンライン参加含む）（31.5%）
- 5位 図書館、博物館、美術館での学習、鑑賞（バーチャルツアー等を含む）（22.6%）

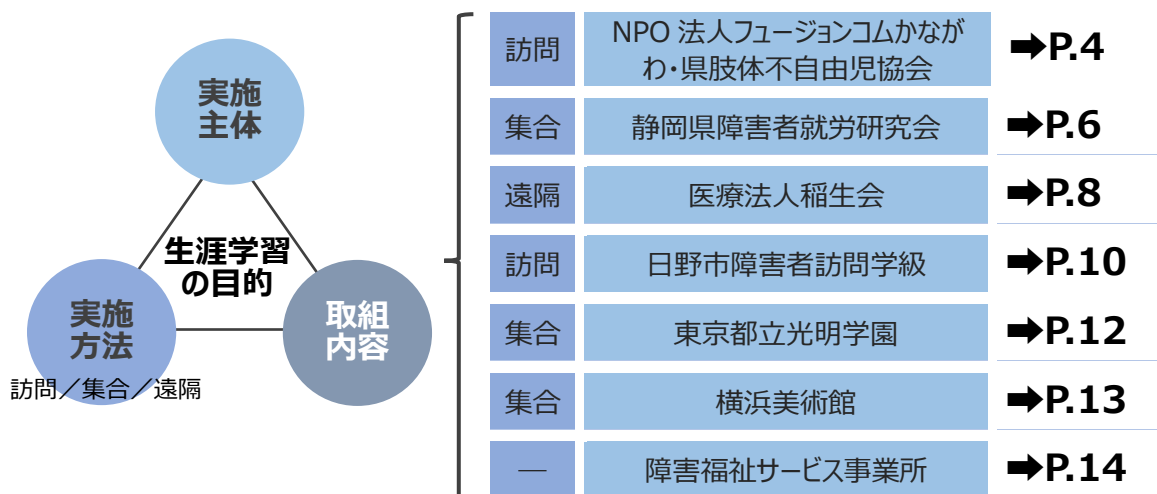
地域で生涯学習を応援するには？

重度重複障害のある方は、自分で自分自身が学びたいことを表現するのが難しい人、地域の活動の場への参加には特別なサポートが必要な人など、学習のために支援が必要な人がほとんどです。

地域には、障害のある方の生活を支援する人もいれば、学習や文化芸術活動に関わる人もいます。関係者それぞれが持つ基盤・強みを活かし、連携することで、多様な生涯学習の場を作ることが可能になります。



次のページからは、様々な関係者による生涯学習への取組事例を紹介します。各団体では、重度重複障害のある方のニーズに応えるために、テーマや方法に工夫を凝らし、学びの機会を創出しています。どのような学びの方法、内容があるのか参考にしてください。



掲載事例について興味・関心のある方は報告書をご確認ください

重度重複障害のある方へ生涯学習機会を提供する団体の取組内容の詳細は、「生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究」の報告書で確認できます。報告書には、障害児者・家族を対象にしたアンケート調査の結果も掲載しています。

https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/mext_01845.html



医療的ケアが必要な方のための「訪問カレッジ Enjoy かながわ」 特別支援学校の元教員が訪問し、本人が望む学びを実現

NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会

基本情報

※2022年1月時点

〔団体種別〕 NPO 法人 〔所在地〕 神奈川県 〔設立年〕 2009年
 〔職員数〕 法人職員 3人、訪問カレッジの学習支援員 15人
 〔取組開始時期〕 2019年 〔利用者数〕 11人 〔利用料金〕 年間 5,000円
 〔HP〕 <http://www.kenshikyou.jp/>



取組概要

生徒からの「卒業後は学びの時間がなくなってしまう」という声に応えようと、特別支援学校の元教員が「訪問カレッジ Enjoy かながわ」を立ち上げた。卒業後、障害や病気のために通所施設等の毎日の利用が難しい18歳以上の方を対象に、学習支援員が自宅を訪問し、生涯学習を支援している。

活動内容

▶ 目的・ビジョン

だれもが学び続けられる社会をミッションに、特別支援学校卒業後に途絶えてしまう「学ぶ機会」「自己決定・自己実現ができる機会」を補い、自分らしく生きる、自分の学びを探す機会の提供を目指している。

▶ 利用者の特徴

特別支援学校で訪問教育を受けていた人が多く、ほとんどの人が人工呼吸器管理などの高度の医療的ケアが必要で、自宅での生活が主である。利用者は20代で、学校の紹介で卒業時から開始する例が多い。

▶ 学習内容

本人が学びたい内容と学習支援員の得意分野をマッチングして、学生1名につき4～5名のチームを編成。本人や家族のニーズに応じて、月1～4回、複数名が訪問し、体の取組（マッサージ・体操）、読み聞かせ、音楽・音楽療法、創作・絵画・調理、タブレットを使った授業、社会体験やコミュニケーション等を実施する。

▶ 工夫している点

学校との連携…卒業前に利用希望があった場合は、学校での授業の様子を見学し、学びが継続できるよう努めている。積極的な学校では、移行支援会議への同席や通所先への訪問見学を調整してくれたり、アフターフォローとしてカレッジの様子を見学されたりしている。

学生証の発行…訪問カレッジを新たな学びの場として意識してほしく、入学式を開催して学生証を渡している。年度の記録・学びの区切りとして、年度末には修了証を授与し、振り返りアンケートも実施する。

補助金の活用…かながわボランティア活動推進基金 21の「ボランティア活動補助金」を活用して、訪問支援員の交通費、教材費、通信費、研修会の講師料等に充てている。

学び = 自己表現だと思って、 一人ひとりの希望に応じた活動を応援しています！



【コーディネーター 成田さん】

生涯学習を支援するきっかけは？

訪問教育を受けている神奈川県の実生が、「卒業後に学びの時間がなくなってしまうことが嫌だ」と、東京都の団体に相談していると耳にしたのがきっかけです。特別支援学校の教員だったこともあり、卒業後の学びの継続は、前々から気になっていた問題でした。退職後のチャレンジに尻込みする気持ちもありましたが、当時の希望者は2名だったので、**考えるよりは始めることが大事だと思い、取組をスタート**させました。

訪問カレッジで大切にしていることは？

訪問カレッジでは、「人生を楽しむ学びにつなげられるか」を重視しています。言い換えると、**どんなことが楽しいか、嬉しいかを自分で探し、学びたいことを意思表示することが必要**です。この点は、学校の与えられる学びとは異なりますね。言葉で伝えることが難しい人は、家族を含めて複数人で表情や目の動きで意思を読み取り、関わっています。



利用者の反応は？

利用者は、**各々の関心に応じて、活動的になったり、自分の世界を広げたり**しています。腕編みで家族にプレゼントを贈り、学びを活かして人を喜ばせる経験をした人、衛星の打ち上げ時にメッセージを入れる取組に応募し、打ち上げの様子も楽しんだ人などもありました。**家族からは、本人に楽しみがあって、本人を肯定してくれる存在があることで、本人も家族も生活の幅が広がっている**という声をいただきました。大学との連携で、大学生が同行訪問すると、同年代との出会いに対して、いつもとは違う表情を見せてくれますね。



重症心身障害児者施設で開催する「訪問カレッジ静岡」 本人が選択できる＋新しい感覚を楽しめるプログラムを提供

静岡県障害者就労研究会

基本情報

※2019年11月時点

〔団体種別〕 任意団体	〔所在地〕 静岡県	〔設立年〕 1996年
〔職員数〕 33人（うち、特別支援学校（元）教員13人）		
〔取組開始時期〕 2018年	〔利用者数〕 62人※	〔利用料金〕 無料
〔HP〕 http://shizuoka-dws.com/		



取組概要

静岡県障害者就労研究会の会員（特別支援学校の元教員）が、卒業後も学びを支える必要性を感じて「訪問カレッジ静岡」をスタート。重症心身障害児・者施設つばさ静岡を会場に外部講師を招く形で、重症心身障害児者を対象とした集合型の生涯学習活動を実施している。

活動内容

▶ 目的・ビジョン

重症心身障害児者が特別支援学校の在学中に育んだ、意思表示する力を、卒業後も継続的に広げたり生かしたりすることを目指している。また、参加者には一人の大人として向き合い、極力、発達の年齢を考慮したプログラムを心掛けている。

▶ 利用者の特徴

つばさ静岡（重症心身障害児・者施設）の利用者と近隣に住む重症心身障害児者が参加する。年齢は子どもから60代まで幅広い。自宅からの参加者は、特別支援学校卒業後の若い人が多い。

▶ 学習内容

年2回、外部の専門家等を講師として招いて、音楽（生演奏、歌）、コーヒー・お茶体験、写真、美術、プラネタリウム、アロマ・マッサージ等のプログラムを提供する。コーヒーを焙煎し、豆を挽くところから体験する、オペラやミュージカル音楽の演奏を聞くなど、参加者が新しい感覚と出会うことを意識している。

▶ 工夫している点

参加時間の設定…体調が不安定な人も多いため、参加時間を設けていない。開催時間3時間の間、その人の体調や関心に応じて、数分だけ顔を出したり、2時間ほど参加したりと自由に参加してもらっている。

大学生の関わり…ボランティアの大学生が、参加者と一緒に学び、楽しむ位置づけで参加している。参加にあたっては、訪問カレッジ静岡の趣旨説明や、施設職員から気を付けるべき点などの説明を行う。

施設の協力…医療的ケアが必要な方でも安心して参加できるように、専門職のいる施設に訪問する形で実施している。取組実施までに研究会と施設の多職種で3回程度打ち合わせを設け、すり合わせを行った。

研究会でアイデアを出し合って、 参加者全員がともに学べる場を目指しています！



〔プログラム企画担当 瀬戸脇さん〕

生涯学習を支援するきっかけは？

私は元教員ですが、退職前の最後の勤務先が肢体不自由の特別支援学校でした。訪問教育の先生たちと話す中で、**卒業後、中・高等部まで頑張ってきた子どもたちの学びがしぼんでしまわないよう、何かできないか**と考えたのが始まりです。現役の教員仲間が多いので、**訪問して日常的にサポートするのは難しく、医療専門職のいる施設の場を借りた集合型の学習に挑戦**することにしました。

どんなことに気を付けて活動していますか？

大事にしていることは、「参加者の選択」です。訪問カレッジを始めたばかりの時は、研究会が企画した内容を行うという感覚でしたが、**本人の選択や主体性に焦点をあてると色々なことができると気が付き、アプローチ方法が変わって**いきました。例えば、**アロマ体験では、最初は運営側で香りを決めていましたが、今は参加者と話し合って好みの香りを選んでもらう方法に変わりました**。本人の意思に基づいて選択することは、訪問教育でこだわってきた点なので、在学中の学びと今の活動はつながっているように感じています。



参加者の反応は？

言葉でのコミュニケーションが難しい参加者が多いのですが、一緒に参加した施設職員や大学生から、「**笑ってくれた」「力が抜けてリラックスして楽しんでいた」「嬉しそうな声を出していた**」といった言葉をよく聞きます。コーヒーが飲めると思って会場に来てくれる人もいて、**参加者の中に「訪問カレッジ静岡」が“経験”として残って、次回を楽しみにしてもらえている**という手ごたえを感じています。普段、**自宅で生活している参加者・家族にとっては、自宅外での活動の場が少ないので、仲間に会える大切な場所になっている**気がしますね。あと、ボランティアの大学生たちが「また参加したい」と言ってくれるのは、皆が楽しく過ごせている証なのでとても嬉しいです。

オンラインで誰でも参加できる「みらいつくり大学校」 参加者のニーズから多種多様な講座を作成し、発展させる

医療法人稲生会

基本情報

※2022年1月時点の登録会員数

〔団体種別〕 医療法人 〔所在地〕 北海道 〔設立年〕 2013年
〔職員数〕 79人（うち、医師10人、看護師20人、社会教育関係者1人）
〔取組開始時期〕 2018年 〔利用者数〕 159人※ 〔利用料金〕 無料
〔HP〕 <https://futurecreating.net/>



取組概要

「困難を抱える人々とともに、より良き社会をつくる」を理念とする稲生会では、診療所、訪問看護ステーション、居宅介護等の医療・福祉サービスとともに、障害者が主体的に学び活躍できる機会をつくる「みらいつくり大学校」を開講。オンラインで、哲学、映画、読書、フラの体験など多種多様な講座を開講している。

活動内容

▶ 目的・ビジョン

学びたい人が学べるコンテンツを用意し、障害の有無に関わらず参加できる“ともに学ぶ場”をつくることを目指している。

▶ 利用者の特徴

医療的ケアの有無や障害の程度、年齢、居住地といった参加条件は一切なく、障害の有無にかかわらず参加可能。障害のある参加者の年齢としては、乳幼児が親と一緒に参加するケースから30代まで幅広い。講座によっては、生活介護事業所や高齢者向けのデイサービス等の事業所単位で参加がある。

▶ 学習内容

様々なオンラインプログラムを用意し、会員が関心に応じて自由に参加する形式。定例開催のプログラムには、哲学学校、読書会、映画同好会、お手話べり、アイヌ語講座、オンライン＊ハワイアン（フラダンス活動）等がある。その他、不定期に開催している活動として外部講師を招聘して実施する「講義」がある。

▶ 工夫している点

自由な参加…自由に学習の場を使ってもらえるように、自己紹介や参加者に関する情報収集をあえて行わない場合がある。参加方法もそれぞれの状況に合わせて柔軟に参加できるように、音声を聞き流すだけの「ラジオ参加」も歓迎している。重症心身障害者の方が、読書会に参加して楽しんでいる様子も見られている。

講座の開発…参加者の学習ニーズを企画に活かすため、既にある講座の中で新たに学びたい内容が出てきたときには、内容に応じた実施方法を検討する。参加者の様子を見ながら「あの人が好きそう」と企画を立ち上げることや、重症心身障害児と暮らす職員の情報や日々のサービスで拾ったニーズから企画することもある。障害の有無によらず、活動の企画者になったり、時に講師になったりしている。

職員インタビュー

障害のある人もない人も、ともに学ぶことで、
新しいつながりや興味関心が生まれています！



〔学びのディレクター 松井さん〕

📌 生涯学習を支援するきっかけは？

医療法人稲生会では、これまで、医療や障害福祉サービスを提供してきました。支援する側・される側の関係性を問い直すことも大切な目標の一つです。生涯学習の場では、患者が教える人になったり、職員が学ぶ人になったりします。立場を越えて、ともに学ぶ仲間になり得ます。ある重症心身障害児の母親の「卒業後の生涯学習の場をつくりたい」という願いから「みらいつくり大学校」が始まりました。たまたま、2018年に文部科学省の実践研究事業が始まったタイミングで、当法人の取組が採用されたのも後押しになりました。

📌 生涯学習に取り組む中で感じたことは？

生涯学習の場では、スタッフや障害のない参加者も学ぶことが多く、私たちの目指す活動は特定の誰かのためだけのものではないと感じました。その経験から、障害の有無に関わらずみんなが参加できる学び場づくりを続けています。もちろん、参加したい人に必要なサポートがあれば、できる限り一緒に考えながらバックアップしています。



📌 利用者の反応は？

最近、私がよく話す参加者は、映画に関心があることを知った当法人のヘルパーが声をかけて連れてきた方です。回数を重ねることで発言が増え、今は意見を伝えて講座で扱う映画を一緒に選んだり、他の講座に参加したりするようになりました。重症心身障害児者の方だと、オンラインハワイアンや音楽講座などに参加して楽しんでくれています。私は、活動を通して、みらいつくり大学校でなければ出会えなかった人とのつながりを感じています。



日野市の委託事業である「日野市障害者訪問学級」 市と障害者団体で連携して、訪問での学びの継続をサポート

日野市・日野市障害者問題を考える会

基本情報

※1 日野市障害者問題を考える会の設立年

※2 日野市障害者訪問学級にかかわるスタッフ数(2022年2月時点) ※3 2022年2月時点

〔団体種別〕 地方公共団体・任意団体 〔所在地〕 東京都 〔設立年〕 1973年^{※1}

〔職員数〕 講師を含めて23人(うち、特別支援学校元教員8人、言語聴覚士1人)^{※2}

〔取組開始時期〕 1981年 〔利用者数〕 15人^{※3} 〔利用料金〕 無料

〔HP〕 <https://www.city.hino.lg.jp/bunka/shogai/gakkyu/1003202.html>



取組概要

卒業後の障害者の学びを支援するため、日野市が日野市障害者問題を考える会に事業委託をして、家庭に講師を派遣し授業を行う「日野市障害者訪問学級」を実施。講師養成講座を受講した市民講師と障害者がともに学ぶ機会になっている。

活動内容

▶ 目的・ビジョン

命ある限り学び、学ぶことで生きる意欲をもらうことは一生継続すべきことと考え、「卒業後も学びたい」という意欲のある人の学びの継続を目指している。

▶ 利用者の特徴

対象は、一人で外出することが困難で、義務教育終了後に進学できなかった学習意欲のある人で、重度の肢体不自由や重症心身障害の人の利用が多い。特別支援学校高等部卒業生の利用が増えている。

▶ 学習内容

講師1～2名が、学級生の自宅を訪問して、本人・家族と授業内容を相談しながら、一般教養、書道、パソコン、音楽、コミュニケーション等に取り組んでいる。学級生が参加する移動教室や体育交流会等も開催。

▶ 工夫している点

講師の育成…新しい講師の募集・養成と、講師間での学び合いを目的に、講師養成講座を年1回開催。教育や福祉に関わりのない一般市民が参加して、市民講師として活躍するきっかけづくりになっている。

▶ 地方公共団体の関わり

日野市は、年間1人あたり1講座約65時間分の講師料(2600円/時)・教材費(4000円)を委託費として支払う。また、講師養成講座の共催、特別支援学校の進路担当教員と会合を持って、訪問学級の保護者向け説明会を行うなど、日野市障害者問題を考える会とともに取組を推進している。市が特別支援学校に働きかけることで、保護者は訪問学級を視野に入れて進路選択を行えるようになっている。

職員インタビュー

市の職員、講師の皆さんと協力して、
学級生が学び続けられる環境を作っていきます！



〔代表 名取さん〕

📌 生涯学習を支援するきっかけは？

1981年に、日野市が「日野市障害者訪問学級」を立ち上げたことです。私たちは、日野市に住む障害のある人の様々な問題を考える会だったのですが、当時の代表が、**親や当事者からの「学びたい」という声を受けて、受託者として手を挙げました。**早いものでもう40年になります。

📌 日野市とはどのような連携をしていますか？

日野市は、費用以外にも、**特別支援学校との情報共有や講師養成講座の開催でバックアップ**をしてくれています。職員の方は、熱心に協力してくれ、年に数回になりますが、**家庭訪問に同行して、学級生の様子や講師の取組を実際に見て**くれています。ある職員の方は、「訪問学級という学びの場で、本人も講師も学び合えることが大切」と話されていて、この事業の必要性をとともよく理解してくれていると感じます。



📌 学級生の反応は？

一人ひとりが、学びを楽しんでいるように思います。学級生の家族からは、「**訪問学級を続けたことで、いろいろな新しいことができるようになった**」と報告を受けることがあり、**年月をかけて学びを重ねることで、学習が生活に活かされている**と感じています。重度障害のある方は受け身の生活になりがちなので、訪問学級の講師が、「**これをやってみよう**」と励ましなが**ら学びを継続することは、本人からの発信や意欲を引き出すために重要**ではないでしょうか。



好きで打ち込める活動の発見から卒業後の活動まで 都の補助事業を活用しながら学校として支援

東京都立光明学園

基本情報

※光明特別支援学校と久留米特別支援学校の統合年

〔団体種別〕 公立学校 〔所在地〕 東京 〔設立年〕 2017年※ 〔職員数〕 217人（うち、看護師6人）

〔取組開始時期〕 2017年 〔利用者数〕 不明 〔利用料金〕 無料

〔HP〕 <http://www.komeigakuen-sh.metro.tokyo.jp/site/zen/>



取組概要

肢体不自由教育部門と病弱部門のある光明学園では、多くの生徒の進路が障害福祉サービス事業所となる。卒業後も好きな活動を継続できるよう、経営計画に「卒後支援と連携」を位置づけ、卒業生を対象とした生涯学習活動を実施・サポートするとともに、進路指導の一環として活動を紹介している。

活動内容

▶ 目的・ビジョン

特別支援学校が生涯学習の起点（オリジン）と考え、生徒が在学中に見つけた、生涯にわたって打ち込めること、好きなこと、自信のあることを、卒業後も継続できることを目指して取組を行っている。

▶ 学習内容

卒業生の自主的な活動は、同窓会、俳句の会、ハンドサッカー、ボッチャの4種類。学校が主導する活動は、東京都の学校開放事業で実施する光明カレッジ、陸上部、ハンドサッカー部の3種類。

- 光明カレッジ…調理・音楽・スポーツ・染物などを実施。企画運営は親が中心だが、年4回まで教員が講師やサポート役として入る。学校での実施や卒業直後の人の参加が多いので安心感があり、重度の障害のある方の参加が多い
- 陸上部・ハンドサッカー部…在学生の部活動に、卒業生も参加できるような位置付け。ハンドサッカーをさらに続けたい人は、自主的な活動として行われているハンドサッカーのグループに移行する。

職員インタビュー

在学中から卒業後へ、生涯学習は続いています！

生涯学習は卒業後だけでなく、在学中を含めた一生涯の学びです。自分で好きなものを選択し意思表示したり、打ち込めることを見つけたりしてほしいと考え、在学中には、美術や書道、読書に力を入れています。卒業後もその力を発揮できるよう、学校としても取り組んでいますが、学校以外のつながりの中で活躍できる場が増えてほしいと願っています。〔統括校長 田村さん〕



多様な刺激で“心が動く”プログラムを開発 病院内で美術に触れられるアウトリーチ活動を展開

横浜美術館

基本情報

〔団体種別〕公益財団法人 〔所在地〕神奈川県 〔設立年〕1989年 〔職員数〕約50人
〔取組開始時期〕2007年 〔利用者数〕不明 〔利用料金〕無料
〔HP〕 <https://yokohama.art.museum/>



取組概要

横浜美術館では、開館以来、障害児を含む子どもを対象に、「目で見て、手で触れ、やってみる」をテーマとした創作・鑑賞のワークショップ「子どものアトリエ」を行ってきた。この実践経験を活かし、重症心身障害のある方を対象に、病院や医療センターに訪問する形での“心の動く”プログラムの提供を行っている。

活動内容

▶ 目的・ビジョン

美術の基本は、“心が動く”ところにある。参加者がちょっとした刺激やいつもと異なる経験をして心を動かすこと、さらには、参加する障害児者とスタッフが心の交流をすることを大切にしている。

▶ 学習内容

子どものアトリエの「学校のためのプログラム」をベースに、重症心身障害児者は自ら動くことができない場合を考慮し、絵の具を触る、鉄の彫刻でできた音具を叩く・触れる、水・お湯を入れたビニールに寝そべるといった、様々な五感への刺激を感じ取れる機会を設定している。

▶ 工夫している点

交流のゆとり…当日は様々な道具や体験の機会を準備するが、準備した全てのものを体験しなくてもよいと伝えている。参加者の表情や体の変化が見られたら、そこに時間をかけることで、介助する施設の看護師、職員、美術館スタッフと参加者との心の交流を促している。

職員インタビュー

美術の力で新しい一面を引き出します！

横浜美術館のスタッフは、医療・福祉について詳しくありませんが、美術の専門家としてどんな関わりができるかを考えて取り組んでいます。訪問先の介護士や看護師の皆さんから、「この人がこんな表情をするとは思わなかった」と言われることもあり、参加者の方の新しい感覚や新しい一面を生み出す機会になっていると感じています。



〔企画担当 山崎さん〕

障害福祉サービス事業所での日中活動

入所 19～29歳の青年期に対応する「櫛大学」(秋津療育園)

〔団体種別〕 社会福祉法人

〔実施事業〕 療育介護、生活介護、短期入所、特定相談支援、医療型障害児入所施設、障害児相談支援、病院、訪問看護ステーション等

〔定員〕 長期入所 175人、医療入院・短期入所 3人

20代で、「学びたい」「体験したい」という若いエネルギーを発揮する過ごし方ができると、壮年期への備えとなり、大人としての生き方が充実するのではと考え、長期入所の19～29歳の利用者を対象に、「櫛大学」という日中活動を実施。音楽、美術、創作など毎年テーマを変えて、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、支援員が月に1回、表出や運動などの能力発揮や仲間と一緒に取り組める活動を行っている。学びの節目となるように、入学式や修了式を行うなどの工夫もしている。

通所 学びや本人の希望を意識した日中活動(シャローム上井草さくら)

〔団体種別〕 社会福祉法人 〔実施事業〕 生活介護 〔定員〕 20人

特別支援学校の生徒や家族の「学校で学んだことを活かせる事業所に行きたい」という声を受け、学校の学びに近いプログラムを試行錯誤しながら進めている。園芸活動では、職員と利用者と一緒に、植物の育ちやすさや育ち方を調べて、会議のような形で育てる植物を選定するなど、他者との交流も意識している。また、ゆっくり過ごしたい人もいれば、大きな動きをしたい人もいるので、利用者が動きのある活動とゆったり過ごせる活動の選択ができるように、毎日のプログラムを構成している。

入所 行事に向けた創作活動や訪問カレッジ受入れ(東京都立東部療育センター)

〔団体種別〕 公立医療療育施設

〔実施事業〕 療養介護、生活介護、短期入所、医療型児童発達支援、保育所等訪問支援、医療型障害児入所施設、病院

〔定員〕 長期入所 90人、短期入所 24人、医療入院 6人、生活介護 30人、医療型児童発達支援 5人

長期入所者の日中活動として、創作活動、感覚遊び(スライムを活用した手先の感覚を刺激する活動や、アロマのような嗅覚を刺激する活動)、映画鑑賞等を実施。夏祭りや東部フェスティバル、クリスマスなど季節感を意識した行事があり、行事に向けて様々な作品を制作している。また、外部団体の訪問による生涯学習(訪問カレッジ)の利用希望があれば、活動場所を提供するなど積極的に受け入れている。

日中活動で生涯学習に取り組むヒント

- 数か月ごとに、利用者の学びたい内容を踏まえて日中活動の内容・回数を変更する
- 同じ創作活動でも、感触や色の違う様々な素材を用意し、好みを意思表示し選択してもらう
- 美術館や科学館、障害学習団体等のオンラインコンテンツを利用する(→8ページ参照)

文部科学省の取組について

文部科学省では、「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」として、障害者の生涯学習の機会を全国的に整備・充実するため、様々な取組を行っています。

学びの場を知る

共に学び、生きる共生社会コンファレンス

全国7ブロックで、障害者の生涯学習活動の関係者や関心のある方が集まり、障害者本人による学びの発表、学びの場づくりに関する好事例の共有などを行っています。

中国・四国ブロック以外のコンファレンスは以下のリンクもしくはQRコードよりご覧ください↓→
https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/1421842_00002.htm



まるのつどい
～ニューノーマル時代における
地域のつながりを考えよう！
障害者の生涯を通じた
新しい学びの場づくり～

中国・四国ブロックでは、障害者や支援者、関心のある方に広く参加を募り、重症心身障害者の学びに関する全体会と、文化・学習、スポーツ、インクルーシブをテーマとした分科会を開催しました。



地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究

平成30年度より、多様な学びの場をつくるため、障害者の生涯学習支援のための「地域コンソーシアム」の形成や生涯学習プログラムの開発・実施等を行っています。

他団体の取組は以下のリンクもしくはQRコードよりご覧ください↓→
https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/1418341_00003.htm



地域連携による訪問
(遠隔) カレッジ・オープン
カレッジ@愛媛大学
〔国立大学法人愛媛大学〕

愛媛大学では、地域のNPOや医療従事者、当事者等と連携して、学校卒業後に学習機会の少ない重症心身障害者等を対象とした、個別の「訪問カレッジ」と集団の「オープンカレッジ」を実施しています。

障害者の生涯学習に
向けたウェブ利用の展開と
重度障がい者向けの
学習支援
〔一般社団法人みんなの
大学校〕

ウェブで障害者が学びに参加する基礎や、インクルーシブな学びを行う枠組みの構築を目指して、カリキュラムの開発やウェブによる学習機会の提供、遠隔地を結ぶオープンキャンパスを実施しています。また、重度障害者の学びの推進のため訪問学習やフォーラムを行っています。

第2回医療的ケア児者の 生涯学習推進フォーラム

文部科学省や行政団体、学校関係者、当事者や関係機関など約250人が、取組を紹介しあい、今後の学びについて議論が交わされました。

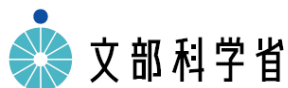


<https://www.youtube.com/watch?v=p9XVwDWeZX0>

学びの場をつくる

重度重複障害者の生涯学習 啓発パンフレット
だれでも参加できる生涯学習の機会を作りませんか？

— 令和4年3月発行 —



本パンフレットは、令和3年度「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」（文部科学省）の「生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究」において、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社が作成しました。
